

J. Rakuno Gakuen Univ., 35 (2) : 21~27 (2011)

シェリーと食

——「シェリー＝熱心な菜食主義者」への疑問——

白石 治 恵*

Shelley and Diet

—— A Question to “An Ardent Vegetarian Shelley” ——

Harue SHIRAISHI*

(Accepted 12 January 2011)

目 次

1. はじめに
2. *A Vindication of Natural Diet* の概要および影響関係
3. シェリーの食習慣
4. 作品の中での食の描写
5. 結び

1. はじめに

イギリス・ロマン派の詩人パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) の菜食主義は有名である。シェリーは 1813 年とそれ以降に *A Vindication of Natural Diet* と “Essay on the Vegetable System of Diet” の 2 つのエッセイを書いており、大学時代から生涯、菜食主義をおおむね通したという身近な友人たちの証言も多数残されている。また詩人の生前のみならず、現代においても、たとえばベジタリアン団体で最も代表的なもののひとつである International Vegetarian Union (IVU) のサイトを見ると、シェリーのベジタリアニズムに関する記事が詳細に掲載されており、一つのアイコンとして扱われているように思われる¹⁾。

シェリーの菜食主義は、単なる健康のためだけではなく、肉体と精神との連結を重視し、さらに飲酒・肉食による心身への悪影響が疾病だけでなく社会悪をも生み出していると考えられることから、社会を改善するために敢行すべきものという考えに基づいている。先行研究の多くは、理念の実行者という積極的なとらえ方をしており、これらの研究で取り上

げられる詩作品での食に関する表現は、通説に従って菜食主義的な面のみに偏って注目しているように思われる²⁾。このように死ぬまで菜食主義を実行してきたとされるシェリーであるが、数種の伝記、また書簡などからは、飲酒・肉食の事実も散見される。また、1813 年以降特に菜食主義について言及する文書や作品もない。ここではたしてシェリーは通説のとおり熱心な菜食主義者であったのか、という疑問が浮かぶ。よって本論では、菜食主義だけにとらわれずに、それを踏まえてシェリーにとって「食」とはどのようなものであったのか、伝記、散文、そして詩から総合的に検証していきたい。

2. *A Vindication of Natural Diet* の概要および影響関係

はじめに、*A Vindication of Natural Diet* の概要を見ていく。

A Vindication of Natural Diet (以下 *Vindication* と略) は、もともと 1813 年に出版されたシェリーの最初の詩集 *Queen Mab* (ウィリアム・ゴドウィンに強く影響を受けて書かれた政治的哲学詩) に、註の一つとして含まれていたものを独立させて、パンフレットとして同じく 1813 年に出版されたものである。“Essay on the Vegetable System of Diet” は *Vindication* とほぼ同様の内容であるが、シェリーの生前は出版されなかった。よって本論では主に *Vindication* を扱いたいと思う。

Vindication でシェリーは、肉食は人間本来の食習慣ではないことを比較解剖学、動物愛護、社会倫理の観点から説いている。また肉食は人間にとって不自然な習慣のため、心身に悪影響を及ぼすと述べ

* 酪農学園大学環境システム学部環境マネジメント学科科学英語研究室

Science English, Department of Environmental Management, Faculty of Environmental Systems, Rakuno Gakuen University 582 Midorimachi, Bunkyo-dai, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

ている。肉食は、動物を殺し、肉を引き裂き、血を飲むことにより精神的に残酷性を増進させ、そのために世界中は争いが絶えないとし、食への貪欲さが国内のみならず他国の食材を過度に求めることとなり、それが帝国主義を助長しているとシェリーは考えている。また過度な食産業による利益の追求が、貧富の差を増大させる一因となっているとしている。

身体への影響として、不自然な肉食・飲酒が様々な疾病の素であるとしている。それらを解消するためには、人間本来の食習慣—野菜やフルーツ・蒸留水などの自然食に戻ることが肝要であり、それにより、人々の心が穏やかになり、心身が健康になる。欲望が抑えられ、人が人を支配し搾取しようという意識がなくなれば、圧政も暴虐も戦争もなくなり、理想社会が到来する、というのがこのシェリーの論文の主な内容である。

現代的観点からは、これらの説は非常に非科学的で安直であり、単なる楽観主義者の空論というように思われるかもしれないが、この論文はシェリー独自の考えというよりはむしろ、当時の時代思潮を色濃く反映しているものでもある。

シェリーが影響を受けた最たるものは John Frank Newton の *The Return to Nature* である。聖書においてアダムとエバの墮落以前の楽園では肉食が無かったことや、ギリシャ神話においてプロメテウスが人間に火を与え調理を教えたことにより肉食の習慣をもたらした、というような説明その他を、シェリーはニュートンの名前を挙げて引用している。また人間は草食動物であるオランウータンと歯の数が同じで最も似ている、というような比較解剖学の知識は Joseph Ritson や William Lambe などから、さらに John Abernethy や William Lawrence などの実際の医師からも当時の最先端の医学的な知識を得ている。また自然科学的視点は James Burnett Lord Monboddo から、飲酒の害については Thomas Trotter から、農地と牧草地との経済性については William Paley から、またシンプルな調理法のすすめについては Jean-Jacques Rousseau からの影響がうかがえる。リトソンからはまた、屠殺の残酷性、肉食の精神への影響などの示唆も受けている。これらの思想は当時の時代思潮そのもので、18世紀の革命を経て、既成社会・既成宗教に対して公然と批判・反論し、新しい科学を基にした新たな概念で理想社会を作ろうという先達に若者シェリーは倣っているのだと思われる。この *Vindication* はまさにシェリーの時代に対する意思

表明であり、マニフェストと言えるかもしれない³⁾。

3. シェリーの食習慣

次にシェリーの食習慣を、伝記や日記、書簡から探っていく。

オックスフォード時代からの友人である、Thomas Jefferson Hogg は、シェリーの様々な様子を生き生きと伝えている。

his pockets were generally well-stored with bread.

The common fruit of stalls, oranges and apples were always welcome to Shelley; he would crunch the latter as heartily as a schoolboy. Vegetables, and especially salads, and pies and puddings, were acceptable; his beverage consisted of copious and frequent draughts of cold water, but tea was ever grateful, cup after cup, and coffee.

Like all persons of simple tastes, he retained his sweet tooth; he would greedily eat cakes, gingerbread, and sugar; honey, preserved or stewed fruit, with bread, were his favourite delicacies, these he thankfully and joyfully received from others, but he rarely sought for them, or provided them for himself⁴⁾.

このようにシェリーは野菜や果物、お菓子を好み、水やお茶を大量に摂取していたことがわかる。またその他のエピソードとして、シェリーはお腹が減ると、急にベーカリーに飛び込み、やがてひと固まりのパンをわきに抱え、歩きながら食べたとか、ポケットにはレーズンも入っていて、パンと一緒に食べたことや、またパンを丸めて玉を作り、射撃の名手のように肖像画や通行人、晚餐を共にしている仲間の鼻に命中させた、など、ホッグはシェリーの食習慣に関する逸話を多く伝えている⁵⁾。シェリーは特にパンを好んでいたようで、そのまま食べるだけでなく、古くなったパンをお湯に浸してふやかしてから軽く絞り、パンを細かくして砂糖とナツメグで味をつけたパナーダという一種のパン粥も好んで食べたようである。そのようなシェリーをホッグは「食に無関心」と時に批判している。しかしその方がシェリーの最初の妻ハリエットにとっては良かったようである。ハリエットは結婚した時 16 歳で料理がほと

んどできず、またその後も学ぼうとはしなかったらしいので、ホッグによるシェリー家の食卓の描写は非常に辛辣である⁶⁾。そのようなハリエットだったので、シェリーが1812年の3月頃から意識的に「ピタゴラス派の食事法」=菜食主義を始めても、喜んで同調できたのかもしれない⁷⁾。ちなみに当時はまだベジタリアン、ベジタリアニズムという言葉はなく、菜食主義をこのように呼んでいたのが、シェリーもハリエットも、書簡にこの「ピタゴラス派の食事法」という言葉を使っている。

シェリーは1812年には意識的に菜食主義を始め、*Vindication* では強い口調で肉食を禁じ、飲酒を否定しているので、実際に日常生活で肉食・飲酒は皆無であったかという点、そうではないようである。

ホワイต์によるとオックスフォード大学の学生時代、シェリーは勉強の傍ら少数の仲間たちを招いて時折「詩とワインの会」を開き、酒を片手に文学を語る時を持っていた⁸⁾。

また『無神論の必然』(*The Necessity of Atheism*, 1811: キリスト教的創造主は科学的論理的に証明できないがゆえに否定する論文)を書いたためにオックスフォード大学を放校になった後、ホッグとシェリーは「心地よいステーキのディナー」(“comfortable dinner of steaks”)をロンドンで食べている⁹⁾。

1816年、二度目の妻メアリーと大陸横断の旅に出た時の経験をまとめた、『6週間旅行の記録』には、旅の途中の休憩で「木陰でパンとフルーツを食べ、ワインを飲んだ」という記述もある¹⁰⁾。

また、体力回復のため肉食をしたという記述もある。グレイボーによると、シェリーの体格はもともと細身、骨太で関節が目立つが、病弱ではなかった。しかし過剰なまでの読書により視力が低下し、猫背になり、興奮してしゃべる時の声は甲高く聞き苦しいものであったと複数の友人が述べている¹¹⁾。しかし実家からの援助が止められたうえに、社会事業への投資と失敗、義理の父のゴドウィンからの絶え間ない金の催促、など、金銭面での悩みは尽きず、また、妻のハリエットを残して1814年にはゴドウィンの娘メアリーと駆け落ち同然に大陸旅行へ行く、住居を頻繁に変えるなど、私生活における苦難が、徐々にシェリーの心身の健康を害していった。メアリーの証によると、シェリーは1815年春頃、激しい消耗(もしくは肺病)のため、健康を著しく壊し、医者にも「長くない」ことを宣告されていた程であった¹²⁾、友人のピーコックが、その消耗はそれまでの質素すぎる食事のせいだと、シェリーにマトンを勧め、そのおかげもあってか、シェリーは回復し、テムズ

川の源流をたどる船の旅に出かけるまでに健康になったという¹³⁾。

その他、ベーコンをととても気に入ってがつがつ食べたとか、体力増進のために医者にも薦められて食べている肉食に辟易しているなど¹⁴⁾、シェリーの飲酒・肉食に関する記述は先行研究ではほとんど言及されていないが、実は多く散見される。よって、シェリーの菜食主義は、徹底的なものと言うわけではなく、通説のような菜食主義一辺倒のイメージは、イメージ先行でしかないように思われる。

4. 作品の中での食の描写

さらに *Vindication* 以外の散文・詩作品における食の描写に目を向けたいと思う。

先に挙げたジョン・フランク・ニュートンとは、1812年末にゴドウィンを通して知り合いになり、その後ニュートン家との交流は頻繁になったようである。菜食主義の実践者として名高いニュートン家では、菜食料理の工夫も巧みであった。ホッグはニュートン家の食卓を以下のように説明している。

Certainly their vegetable dinners were delightful; elegant and excellent repasts; Flesh, fowl, fish, and 'game'; never appeared - nor eggs, nor butter bodily... We had soups in great variety, that seemed the more delicate from the absence of meat.

There were vegetables of every kind, plainly or stewed or scientifically disguised. Puddings, tarts, confections and sweets abounded. Cheese was excluded. Milk and cream might not be taken unreservedly; but they were allowed in puddings, and sparingly in tea. Fruits of every description were welcomed. We luxuriated, in tea and coffee, and sought variety occasionally in cocoa and chocolate¹⁵⁾.

菜食主義に関して、ホッグよりもシェリーの方が熱心であったので、シェリーもこのようにニュートン家の食卓から大きな感銘を受けていたかと言うと、そのような記述はシェリーの散文にも、書簡にも、伝記にも見当たらない。ニュートン家には頻繁に出入りし、共に食事をとる機会も多かったが、料理に関する言及はなく、ただ、*Vindication* に付けた註の中で「ニュートン家の子供たちは考えられる限りの美しさと健康に恵まれている。たいへんやさしく柔

和な性格である。」と、食事法には一切触れず、その結果にのみ目を向けている。このことから言えるのは、シェリーはやはり食に関心が向かなかったのではないか、ということである。

では詩作品の中ではどうであろうか。エリスのレキシカル・コンコーダンス¹⁶⁾より詩の中に登場する食に関する言葉を探すと、以下の通りになる。

bread	10 箇所
fruit	47 "
food	75 "
eat	30 "
vegetable	n. 0 " , adj. 2 箇所

あれほど大好きな bread は意外に少なく、また vegetable がほとんど無いのは、詩に用いる言葉として不適當、詩的な言葉ではないということなのであろうか。あるいは音節も多いので、韻文内で使うのは難しいのかもしれない。fruit が比較的多いのは、文字通りの「果物」として用いているのと、比喩的な「産物」として使用しているのがほぼ同じくらいあるからである。特徴的なのは、最も数多く使われている food である。この他の単語は皆、ひとつの詩に 1 回、多くても 2 回程度の使用頻度であるが、food はある作品に多く用いられており、作品が偏っている。その作品は、*Laon and Cythna* (1818), *The Cyclops* (1819), *The Cenci* (1829) である。*Laon and Cythna* には 26 回、*The Cyclops* には 7 回、*The Cenci* にも 7 回登場している。

この三つの作品はどれも残酷で、*The Cyclops* にはユーモアもあるが、どぎつい描写が多く用いられている¹⁷⁾。また創作年もたいへん近い。具体的な場面を見てみよう。

まず *Laon and Cythna* では、

Like rabid snakes, that sting some gentle
child
Who brings them food (V. vii. 1-2)

First Want, then Plague came on the beasts;
their food
Failed, and they drew the breath of its decay
(X. xiv. 1-2)

There was no food, the corn was trampled
down (X. xviii. 1)

のような悲惨な描写もある一方、

...when food was brought to them, her share
To his averted lips the child did bear
(V. xxx. 4-5)

But now I took the food that woman offered
me; (V. lii. 9)

等、単純に生命を維持するためのものという使い方もある。

The Cyclop では、ユリシーズは航海の途中で食糧の補給のために島に立ち寄ったので、“Hang empty vessels, as they wanted food” (79) や、“Provide us food, of which we are in want” (126) のような「食べ物」をよこせ」という意味のセリフが多いようである。

The Cenci では、チェンチ伯が己の極悪非道な行いをさも楽しげに話す場面で、そのような行いが、“Is my natural food and rest debarred” (I. i. 90) となり、さらなる残虐の糧となるとうそぶく。第 4 幕第 1 場 128 行では、言うことを聞かない娘に腹を立て、父親は神と同等であるからと絶対性を誇示し、呪いの言葉を吐く (“Earth, in the name of God, let her food be/Poison,” IV. i. 128-129)。どちらの場面も、food は人体に滋養と健康をもたらすものとしては描かれていない。

さらに、eat という単語に目を広げると、使用頻度はある作品に偏ってはいないが、どの作品の中でも、“Till she will eat strange flesh” (*The Cenci*, III. i. 48), “What! Do they eat man’s flesh?” (*The Cyclops*, 120), “and eat/The dead in horrid truce” (*Laon and Cythna*, X. iii. 7) など、あまり良いものを食す描写には使われず、特に人肉食に結び付けて使用されている例が多くある。

詩の中で使われている表現をまとめると、「何を」「どのように」が描かれずに「ただ食べる」「食べ物」という単純表記で用いられるか、健やかな健康をはぐくむための食事ではなく、暴君や、悪に支配された人間の残虐性や悲惨さを描く表現として使われていることも多いといえる。感性あふれる豊かな詩的言語を駆使する彼の表現の中においては、あまりにお粗末な使用法である。シェリーにとって「食べる」表現は、積極的に詩の中に取り入れようと思わせるものではなかったのであろう。

5. 結 び

これまでシェリーのエッセイ *A Vindication of Natural Diet* と、伝記や書簡、散文から実際のシェリーの食習慣、さらに詩作品から食の用法を見てきたが、これらをまとめた上で言えることは、結局シェリーは食に無関心であった、ということに尽きるのではないだろうか。

シェリーは、飲酒・肉食を苦手とする自分の個人的嗜好を、一般的な成人男性とは異なる自分のこの個人的性質を、時代思潮に同調し、知識で理論武装することで自己正当化しようとしていた部分もあったと思われる。それは *Vindication* 以外では、どこにも、食に対する積極性が認められないからである。もし *Vindication* で提唱する自分の理論が本当に正しいと思い、菜食主義が本当に社会を変えられると思いつけていたのなら、1813 年以降も何らかの形で表現し、人々に訴え続けたであろう。シェリーは 1813 年以後も人民を苦しめる暴君・商業・宗教の三大悪に反対し、人権を無視する圧政に反対し、人権を擁護し理想社会を追求する政治的論文は書き続けてきたが、この、自然食を公に訴える行動・言動はこれ以降一切ない。肉食をする友人たちに対しても全くこだわらず、身近な人々に積極的に菜食主義を勧めることもほとんどなかった。*Shelley's Venomed Melody* でクルックとギトン、シェリーが性病にかかっていたため、その治癒するために熱心に食生活の改善を試みていた、という説を展開しているが、この説はシェリーとメアリー両方の研究者から賛成と疑問の声が挙げられている。伝記をつぶさに読むと、積極的な食事療法を試みている姿勢よりは、個人的嗜好と関心の低さから、むしろ食事そのものをないがしろにしていたようにも思われる。それはシェリーが興味を持ったほかのことと比べると、関心の高さ・低さを比べることができる。シェリーは好きなことには極端に執着し、また好奇心旺盛で様々なジャンルを学び、体験しようとする傾向がある。よって今回伝記や作品、書簡、散文などから判断できることは、結局は食に対しての関心の低さであり、したがって通説のような「熱心な菜食主義者で一生を通じてその主張をしていた」姿には疑問を持たざるを得ない。

この 1813 年に持っていた思想と情熱がなぜその後あからさまになくなってしまったのか、その考察と解明は、今後のさらなる研究課題とする。

(本論は 2010 年 10 月 2 日の日本英文学会北海道支

部第 55 回大会での口頭発表原稿に、加筆訂正したものである)

註

- 1) International Vegetarian Union Website (<http://www.ivu.org/>)
- 2) Cf. Holms, 220, Cameron, 227-32, White, I, 298-300, Clark, "The Date ...," 70-76. Axon, Salt, 120-121.
- 3) John Frank Newton, *The Return to Nature, or a Defence of the Vegetable Regimen, with some account of an experiment made during the last three or four years in the author's family* (1811)
Joseph Ritson, *An Essay on Abstinence from Animal Food as a Moral Duty* (1802)
William Lambe, *A Medical and Experimental Enquiry into the Origin, Symptoms, and Cure of Constitutional Diseases* (1805)
John Abernethy (1764-1831) 外科医, ロイヤルカレッジ教授
William Lawrence (1783-1867) 医師
James Burnett Lord Monboddo, *On the Origin and Progress of Language*
Thomas Trotter, *A View of the Nervous Temperament* (1808)
William Paley, *The Principles of Moral and Political Philosophy* (1785)
Jean-Jacques Rousseau, *Emile ou de l'éducation* (1762)
- 4) Hogg, I, 87-88.
- 5) Hogg, I, 86-89, 256, II, 30-33, 80-91, 328-331. など。
- 6) "Some considerable time after the appointed hour, a roasted shoulder of mutton, of the coarsest, toughest grain, graced or disgraced, the ill-supplied table" (Hogg, II-30)
- 7) A letter to Elizabeth Hitchener from Harriet, March 14, 1812. (Jones, I, 273)
- 8) White, I, 82.
- 9) Morton, 61.
- 10) *History of a Six Weeks' Tour*, 16.
- 11) Grabo, 24-25.
- 12) Hutchinson, 30.
- 13) "He [Shelley] had been living chiefly on tea and bread and butter, drinking occasionally a sort of spurious lemonade, made of some

powder ... He consulted a doctor, who may have done him some good, but it was not apparent. I told him, ... Three mutton chops, well peppered. He took the prescription; the success was obvious and immediate. He lived in my way for the rest of our expedition, rowed vigorously, was cheerful, merry, overflowing with animal spirits, and had certainly one week of thorough enjoyment of life.” (Peacock, 39)

14) Jones, I, 573.

15) Hogg, II, 84.

16) Ellis, 71, 195, 257, 271, 755.

17) *Laon and Cythna* (1818)……近親相姦関係の兄妹。圧政に対抗するも Laon も Cythna も殺される。

The Cyclops (1819)……ユウリピデスの風刺劇の翻訳。残酷な一つ目巨人が懲らしめられる。

The Cenci (1820)……長年虐待されてきた父親に凌辱された娘が父を殺す。

参 考 文 献

* Primary Sources

詩の引用は, Hutchinson, Thomas, ed. *Shelley: Poetical Works* (Oxford: Oxford University Press, 1990)を使用。

Clark, David Lee, ed., *Shelley's Prose: or the trumpet of a Prophecy* (Albuquerque: The University of New Mexico Press, 1954)

Feldman, Paula R., Scot-Kilvert, Diana, eds. *The Journals of Mary Shelley* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1995)

Hogg, Thomas Jefferson, et al., *The Life of Percy Bysshe Shelley*, 2vols. (London: J.M. Dent and Sons Ltd., 1933)

Jones, Frederick L., ed. *The Letters of Percy Bysshe Shelley*, 2vols. (Oxford: At the Clarendon Press, 1964)

Peacock, Thomas Love, *Peacock's Memoirs of Shelley, with Shelley's Letters to Peacock* (La Vergne: General Books, 2010)

Shelley, Mary, and Shelley, P. B., *History of a Six Weeks' Tour* (Oxford: Woodstock Books, 1989)

* Secondary Sources

Axon, William, *Shelley's Vegetarianism* (Manchester: Vegetarian Society, 1890)

Cameron, Kenneth Neil, *The Young Shelley: Genesis of a Radical* (New York: The Macmillan Company, 1950)

Clark, David Lee, “The Date and Source of Shelley's *A Vindication of Natural Diet*,” *Studies in Philology* 36, January 1939.

Crook, Nora, and Guiton, Derek, *Shelley's Venomed Melody* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986)

Ellis, F.S., *A Lexical Concordance to the Poetical Works of Percy Bysshe Shelley* (New York: Burt Franklin, 1968)

Grabo, Carl H., *Shelley's Eccentricities* (University of New Mexico Publications, 1974)

Morton, Timothy, *Shelley and the Revolution in Taste: The Body and the Natural World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994)

——, “Joseph Ritson Percy Shelley and the Making of Romantic Vegetarianism,” *Romanticism: The Journal of Romantic Culture and Criticism*, No. 12: 1, 2006.

Oerlemans, Onno, “Shelley's Ideal Body: Vegetarianism and Nature,” *Studies in Romanticism*, 34, 1995.

Ruston, Sharon, “Vegetarianism and Vitality in the Work of Thomas Forster, William Lawrence and P.B. Shelley,” *Keats-Shelley Journal* 54, 2005.

——, *Shelley and Vitality* (Hampshire: Palgrave Macmillan, 2005)

Salt, Henry, *Percy Bysshe Shelley: Poet and Pioneer* (1897; London: George Allen & Unwin, 1924)

White, Newman Ivey, *Shelley*, 2vols. (London: Secker & Warburg, 1947)

阿部美春, 上野和廣, 他訳『飛び立つ鷺: シェリー 初期散文集』南雲堂, 1994 年。

伊藤真紀「P.B. Shelley のベジタリアニズム」『KASUMIGAOKA REVIEW』(2007), No.13, 61-72.

Abstract

It is commonly accepted that Percy Bysshe Shelley was a vegetarian and he practiced his opinion throughout his life. However, we can find much evidence from documents on him that the poet ate some kinds of meat and drank wine.

So the question must be asked as to whether Shelley was really a strict vegetarian as commonly believed. In this paper I would like to uncover

his attitude toward diet through conducting an examination of his biography, letters and works.